

キルケゴールとSNS

日時：2025年11月15日（土曜日） 14:00-16:00

会場：京都市立芸術大学 C棟3階「講義室7」

キルケゴール（1813-1855）は、19世紀デンマークの哲学者です。といっても、カントやヘーゲルのように大学教授ではなく、在野の宗教家、著作家として42歳まで活動しました。キルケゴールの出発点は、19世紀前半のデンマークにおけるキリスト教会、それからヘーゲル哲学との全面対決です。デンマーク国教会はルター派で、19世紀には国民のほとんどが、現在でも7割以上がその信者です。またヘーゲル哲学はキルケゴールの時代、知識人の間に圧倒的な力を持っていました。そうした支配的な思想傾向に対して、キルケゴールは自分の思考をぶつけました。

日本ではキルケゴールは「哲学者」ということになっていますが、文学的・哲学的著作は彼にとって必ずしも中心的な活動ではありません。彼がいちばん重視していたのは宗教家としての「教化的」な著作です。キルケゴールは様々な偽名を用いて本を出しましたが、宗教的な著作は実名で書きました。また彼がずっとつけていた7,000頁に及ぶ日記も、その思考を知るには重要とされています。

キルケゴールは、とにかくキリスト教を何とかしなければと考えていました。彼にとって、当時人々がキリスト教だと思っているものは本当はキリスト教ではないし、人々が信仰だと思っている営みは実は信仰とはほど遠いと思えたからです。それはどういうことでしょうか。岩波文庫の『現代の批判』に収録されている「天才と使徒の違いについて」という論考を紹介しながら説明してみたいと思います。

キルケゴールは「最初の実存主義者」と位置付けられたりします。「実存主義(existentialism)」というの、ガブリエル・マルセル（1889-1973）というフランスの神学者が使い始めた言葉です。第二次世界大戦が終結した1945年、ジャン・ポール・サルトル（1905-1980）は、自分の哲学的立場がそう呼ばれることを拒絶しました。けれども翌年には受け入れ、「実存主義とはヒューマニズムである」という本を書きました。他にもよく「実存主義者」として分類される有名な思想家に、『異邦人』で有名な作家のアルベル・カミュ（1913-1960）や、『存在と時間』のマルチン・ハイデガー（1889-1976）がいます。もっとも二人ともこの呼ばれ方を最後まで拒否しています。

彼らが「実存主義」という言葉を嫌ったのには、時代的な理由もあります。第二次世界大戦が終わった解放感、自由の回復と共に、混乱と絶望の気分がパリの若い世代の間に広がっていました。世界戦争や虐殺を引き起こした大人たちは信用できない。そう考える若者の中には、職にもつかず、長い髪で顔を隠し、黒っぽい服を着て、サンジェルマン・デ・ブレ界隈の安ホテルやバーを転々と暮らす者がいて、彼らは「実存主義者」と呼ばれていました。音楽では、アメリカ兵がパリに持ち込んだジャズ、ボリス・ヴィアン（1920-1959）、ジュリエット・グレコ（1927-2020）のシャンソンに代表されるような雰囲気です。「実存主義」はこうした社会風俗の呼び名でもあったので、思想家たちは一緒にされるのが嫌だったのだと思います。

しかしサルトルが「実存主義」を受け入れたのは、こうしたボヘミアン的気分の中にも、何らかの哲学的直観が潜んでいると考えたからだと思います。では哲学としての「実存主義」とは何か。それを最大公約数的に定義するなら、「世界とは何か」「人間とは何か」といった普遍的な問いからではなく、「今ここにいる現実的存在」から思考をスタートさせる態度だ、と言えるでしょう。実存(existence)という言葉は「存在」とも訳されますが、単に「有ること(being)」ではなく、ラテン語の成り立ちからすれば、「外へと(ex-)」「立つ(sistere)」という、決意を込めた行為のニュアンスを持ちます。つまり、普遍的な本質（事物が「何であるか」）ではなく、「今ここにある、このどうしようもない存在」としての自己から出発するという思考として、実存主義を理解することができると思います。

実存主義は必ずしも信仰を否定するものではなく、宗教も実存主義的に解釈することができます。キルケゴールやマルセルは「キリスト教的実存主義者」だと言えます。それに対してサルトル、カミュ、ハイデガーは「無神論的実存主義者」（サルトル以外はこの呼び名を拒否しますが）ということになります。無神論か否かに関係なく、実存主義を実存主義たらしめているものとは、上から押し付けられる「普遍性」「客觀性」

の権威に対する不信感です。この「上」とは、昔はキリスト教会、19世紀にはヘーゲル的歴史観、そして近代的な科学合理主義です。言い換れば実存主義を根本から動機づけるのは、人類の終末と救済、政治改革や科学技術による文明の進歩といった、権威化された物語に対する嫌悪感です。現代に置き換えるなら「核戦争」「気候変動」「生成AI」などといった話題が、そうした権威的物語に属していると言えるでしょう。

さて、キルケゴーとSNSには何の関係があるのでしょうか？もちろん彼の時代にインターネットはありません。けれども19世紀前半は、メディアによって人々の意見がコントロールされはじめた最初の時代でした。メディアというものは新聞です。日本でも明治時代の新聞はそうでしたが、新聞は今の週刊誌のような役割も持っていて、著名人のゴシップなどを赤裸々に掲載し「炎上」することがありました。キルケゴーはその犠牲者になったのです。「コルサル事件」と呼ばれている出来事です。当時のコペンハーゲンの新聞『コルサル（海賊）』が、キルケゴーを風刺する記事を10ヶ月に渡って連載し、30代初めの著作家だったキルケゴーは、外出する先々でその記事を信じた野次馬に取り囮まれ嘲弄されることになりました。

並の人間であればこういう目に遭った時、せいぜい新聞社相手に名誉毀損の訴訟を起こすくらいが関の山でしょう。しかしキルケゴーはこの個人的経験を通して、メディアというものの哲学的本質を見抜いてしまったのです。そして1846年に「現代の批判」という論文を発表しました。これは文芸批評という形をとっていますが、その論点は新聞というメディアによって、人間精神が空洞化され、解体されるという状況に対する告発です。メディアを通じて人間は、自分は行動することなく知識だけが増える。それによってあらゆる重要な差異が「水平化」され、人々の間には無責任な好奇心、傍観者的で無感動な反省が蔓延するようになる、と彼は言います。この場合の「反省」とは、自分は動かず安全な場所からただあれこれ批評するだけ（今のSNS文化で言えば「冷笑系」）というような意味です。

『コンピュータには何ができるか』で有名なアメリカの学者ヒューバート・ドレイファス（1929-2017）が2001年に書いた『インターネットについて』は、キルケゴーの「現代の批判」を取り上げつつ、そのメディア批判を理解する手掛かりとして、ユルゲン・ハバーマス（1929-）の「公共性の構造転換」という考え方方に言及しています。18世紀半ば、ヨーロッパの都市では新聞を読みながらコーヒーハウスで政治談義をするという習慣が生まれました。こうした場をハバーマスは「公共圏 public sphere」と呼びます。それは古代ギリシア・ローマの共和制とは異なり、政治権力を持たない一般市民が、自由な討議を通じて世論を形成してゆく場所で、これが自由で民主的な社会の前提だと彼は考えました。

しかし公共圏は、キルケゴーの生きた19世紀前半には変質していきます。新聞の数が増え、大衆化が進行すると、公共圏はしだいに「凡庸な多数者の領域」となっていくのです。モダニストであるハバーマスは、メディアによる衆愚政治から本来の対話を可能にする公共圏を救出して、未完の「近代」というプログラムを完遂しなければならない、と考えます。一方キルケゴーは、公共圏を作り出す新聞というメディア自体が、そもそも危険な存在なのであると告発しました。この「新聞」を「インターネット」に置き換えば、それはほとんど現在の私たちの状況と重なり合っていることが分かります。

1980年代、大学院を出たばかりの室井尚さんと私は、パソコン通信に夢中でした。まだインターネットは日本に到来せず、全国で数千人から数万人規模のユーザしかいなかったネット空間は開放的で自由であり、ボランティアや助け合いの精神がありました。90年代初頭にインターネットが導入され始めた当初も、そうした自由で民主的なネット文化の雰囲気は残っていました。けれどもユーザ数が急増し、ネットが教育研究や趣味のコミュニティを超えて、大規模な商業活動、政治的プロパガンダ、犯罪などに利用できることがわかると、ネットの主要な意味は人間を解放する突破口から、人々を抑圧・管理・支配する装置へと、180度変質してしまいました。それはちょうど、18世紀のコーヒーハウスにおける新聞の対話的機能が、キルケゴーの時代における扇動的機能へと変質した「公共性の構造転換」と同じです。

私たちはSNSが引き起こす様々な問題に対して、ネットの持つ対話的可能性を回復するにはどうすべきかと、いわばハバーマスのように悩んでいます。けれど、もしキルケゴーが今生きていたら、そもそもインターネットそれ自体が人々を管理・支配し、ルサンチマンを扇動し、人間から行動の可能性を奪い、すべての差異を無化してしまうシステムなのだと、激しく批判することでしょう。そして、もしも彼がそうした議論をSNS上で展開したとすれば、あまりに悲観的な極論ですねとコメントされ、ネット否定論者ならネットで発言するなどディスられ、やがて世の中にはこんな変人もいると「水平化」されてしまうことでしょう。